小さな旅、防府・山頭火

pdf 版

平成１２年１２月２５日
平成 15 年 1 月 31 日(pdf 化)
阿 部 敏 雄(敏翁)

この小さな旅行記は、平成８年（１９９６）１２月１６日仕事の合間に防府の町にある山頭火ゆかりの場所を自転車で廻った時のもので本テキストの原文は、パソコン通信ネット　Ｎｉｆｔｙ－ＳＥＲＶＥのＳＩＧ　ＦＴＡＢＩの会議室図書室　私の旅日記（旅の思い出）に掲載したものですが、それを主体としてそれに画像を加えてみました。
尚、「敏翁」は私のニックネームです。

目　次
(見たいところをクリックすればそこにジャンプします)

１．旅の経緯　1
２．防府へ　2
３．山頭火の簡単な紹介 2
４．小さな旅　3
４．１護国寺(山頭火の墓)　3
４．２生家跡　4
４．３駅前の銅像　5
５．旅のあとで 5
追記(其中庵（ｺﾞﾁｭｳｱﾝ））　6
参考：３句解説 6

１．旅の経緯

仕事で徳山に行く途中で、若干の時間の余裕が出来、防府の山頭火の遺跡、句碑などをレンタサイクルで回りました。

羽田・山口宇部間の飛行機の時間は毎月変わります。古い時刻表で夕方徳山に入る計画を立てて、キップを買いに行ったらその便は無くなっており、早い便にするしか無くなり、時間の余裕が出来たのでした。
それで、かねてから関心のあった山頭火の生地・防府を回ってみようと言う計画を立ててみました。出発５日前のことです。
神奈川県立図書館で、次の２冊の本を借り、それを持って行くことにしました。
１）　山頭火読本　男はなぜさすらうのか　牧羊社　平成２年
２）　種田山頭火　新潮日本文学アルバム　新潮社　１９９３

細かい計画は全く立てず、現地で時間の許す範囲で回ろうと言うものでした。

２．防府へ

１９９６年１２月１６日（月）晴、季節はずれの暖かさでした。
羽田－（ＡＮＡ）－＞山口宇部－（バス）－＞小郡－（山陽本線）－＞　防府着（１３時４０分頃）
ここで、駅の構内にある市の観光案内所を訪れ山頭火に関するパンフレットを貰い、所要時間を尋ね、そこでレンタサイクルを借りる事にしました。
１５時４７分発の山陽本線で徳山へ向かう事としました。
わずか２時間弱の小さな小さな旅です。
コートとボストンバツグをコインロツカーに押し込みカメラだけ持って出発しました。

３．山頭火の簡単な紹介

上記パンフレツトは防府市商工観光課と市の観光協会の制作に依るもので、横３５ｃｍ、縦２５ｃｍの多色刷りを３つ折りにしたのものです。
表には

自由律の俳人
種 田 山 頭 火
昭和の芭蕉
（分け入っても分け入っても青い山）
（雨ふるふるさとはだしであるく）

とあり、彼の生い立ちとその生涯が要約されてします。
そして裏には、防府の地図と関係場所が示されていました。

以下にそのパンフレット主体に彼の生涯を要約してみます。

①「防府時代」明治１５年～
彼は、本名・種田正一、明治１５年（１８８２年）現・防府市八王子（駅から自転車で５分程度）の大地主種田家の長男として生まれる。
明治２５年母フサが３２歳の若さで自宅の井戸に投身自殺。父竹治郎の放蕩が原因と言われる。
その後、家は傾き、現・防府市大道で父とともに酒造業を営むが失敗、一家は離散する。弟二郎が養子先から離縁され、大正７年縊死自殺する。

②「行乞・行脚の時代」大正５年～
熊本、東京と居を変えたあげく、大正１４年４４歳で出家し、熊本県植木町「味取（ﾐﾄﾘ）観音堂」の堂主となるも間もなく瓢然と行乞流転の全国行脚の俳人となった。
（松はみな枝垂れて南無観世音）
（うしろ姿のしぐれていくか）

③「庵住の時代」昭和７年～１５年

長い放浪の旅から足を洗い、庵住を始める。

川棚温泉－其中庵（ｺﾞﾁｭｳｱﾝ、小郡）－風来居（湯田温泉）－一草庵（松山）

この期間も何回か大旅行をやっている。

昭和１５年１０月一草庵にて句会を開き、酒に酔って眠ったまま、翌１１日の未明、５９歳の生涯を閉じる。

（なみあむだぶつなむあみだぶつあかしまたたく）

（おちついて死ねそうな草萌ゆる）

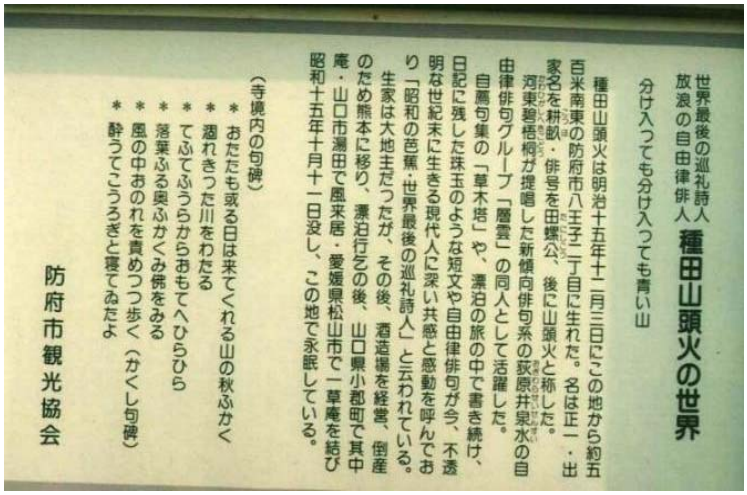
墓は防府市護国寺の境内にある。

４．小さな旅

４．１護国寺（山頭火の墓）

先ず最初に、今回の小さい旅の中では一番遠い護国寺に行きそこから駅へ戻って来る事にしました。

寺は市街地からは北に少し離れた佐波川のほとりにあり、自転車でも１０分程度はかかります。途中で何回か道を尋ねましたが、殆どの人は知らないようでした。



世界最後の巡礼詩人
放浪の自由律俳人 **種田山頭火の世界**

分け入っても分け入っても青い山

種田山頭火は明治十五年十二月三日にこの地から約五百米南東の防府市八王子二丁目に生れた。名は正一・出家名を耕畝・俳号を田螺公、後に山頭火と称した。河東碧梧桐が提唱した新傾向俳句系の荻原井泉水の自由律俳句グループ「層雲」の同人として活躍した。

自薦句集の「草木塔」や、漂泊の旅の中で書き続け、日記に残した珠玉のような短文や自由律俳句が今、不透明な世紀末に生きる現代人に深い共感と感動を呼んでおり「昭和の芭蕉・世界最後の巡礼詩人」と云われている。

生家は大地主だったが、その後、酒造場を経営、倒産のため熊本に移り、漂泊行乞の後、山口県小郡町で其中庵・山口市湯田で風来居・愛媛県松山市で一草庵を結び昭和十五年十月十一日没し、この地で永眠している。

（寺境内の句碑）

＊おたたも或る日は来てくれる山の秋ふかく

＊濁れきった川をわたる

＊てふてふうらからおもてへひらひら

＊落葉ふる奥ふかくみ佛をみる

＊風の中おのれを責めつつ歩く（かくし句碑）

＊酔うてこうろぎと寝てゐたよ

防府市観光協会

寺の名は、摩尼山・護国禅寺（通称護国寺）（上図）、あまり大きな寺ではありませんが、山頭火と県指定有形文化財になっている鎌倉初期建立の「笠塔婆」（下左図）で知られています。笠塔婆も実に立派なもので、屋根付きの囲いで大切にされていました。

山頭火の関係では、彼の墓と６つの句碑がある他、種田酒造で使っていた大きな仕込酒樽や仕込桶（上右図）などが展示されてありました。

墓は高さ５０ｃｍ程度の自然石の一面を平らにしてそこに「俳人種田山頭火之墓」と彫ったものです。(上左図)

墓前には菊、百合の花の他、山頭火が大好きだった日本酒の３号瓶（？）が供えてありました。

（てふてふうらからおもてへひらひら）

（落葉ふる奥ふかくみ仏をみる）

（風の中おのれを責めつつ歩く）

（酔うてこうろぎと寝てゐたよ）　ほか

４．２生家跡

そこから、少し戻って彼の生家跡を訪れました。

生家の敷地は８５４坪もあったのだそうですが､今は１００平方m程の空き地が小さな公園のようになっていて、真ん中に大きな句碑があるのみでした。(上右図)

（うまれた家はあとかたもないほうたる）

尚、「公園」の片隅に投句函が設けられていて「今日のあなたのおもいでにどうぞご投句ください」とありました。

「公園」のそばから細い路地があり、「山頭火の小径」と呼ばれています。

山頭火が小学校へ通った道筋であったと言われています。

そこを自転車を引っ張りながら歩いてみました。小径の横を細い清流が流れている所などがあり、なかなか趣のあるところでした。(次頁左図)

小径のすこし先にある、山頭火の出た松崎小学校には

（ふるさとの学校のからたちの花）

の句碑があります。

４．３駅前の銅像

防府市内及び郊外には、他にも可成りの数の山頭火の句碑があるのですが、時間の関係でここで打ち切り、最後に駅前の山頭火の銅像に挨拶をして今回の小さな旅を終える事にしました。

銅像は、墨染めの衣に袈裟をかけ、一笠一鉢一杖の行脚僧の姿をしています。

今、駅前は大改造工事中で、銅像の真ん前にシャベルカーが駐車していてそれを避けて銅像の写真を撮るのに一苦労しました。

銅像の礎石には次の句が彫って有ります。(上右図)

（ふるさとの水をのみ水をあび）

５．旅のあとで

徳山の仕事先へ着いて、昔の仕事仲間（皆現役）と話をしてみましたが、彼らはもう何年も徳山に住んでいるにも拘わらず、山頭火の跡を訪れた人は誰もいませんでした。

やはり、山頭火は特殊で、現役の人たちの関心を強く引く存在では無いようです。

しかし、私のような現役を引退した人間にとって、山頭火は何か惹かれるものがあります。

私の四国、西国、坂東から海外スペインまでの巡拝の旅は、車に乗り、お金の心配も無い旅で、山頭火の行乞流転の旅とは、心構えからして雲泥の差が有りますが、どこかで接点が有るような気がしてなりません。

（どうしようもないわたしが歩いてゐる）

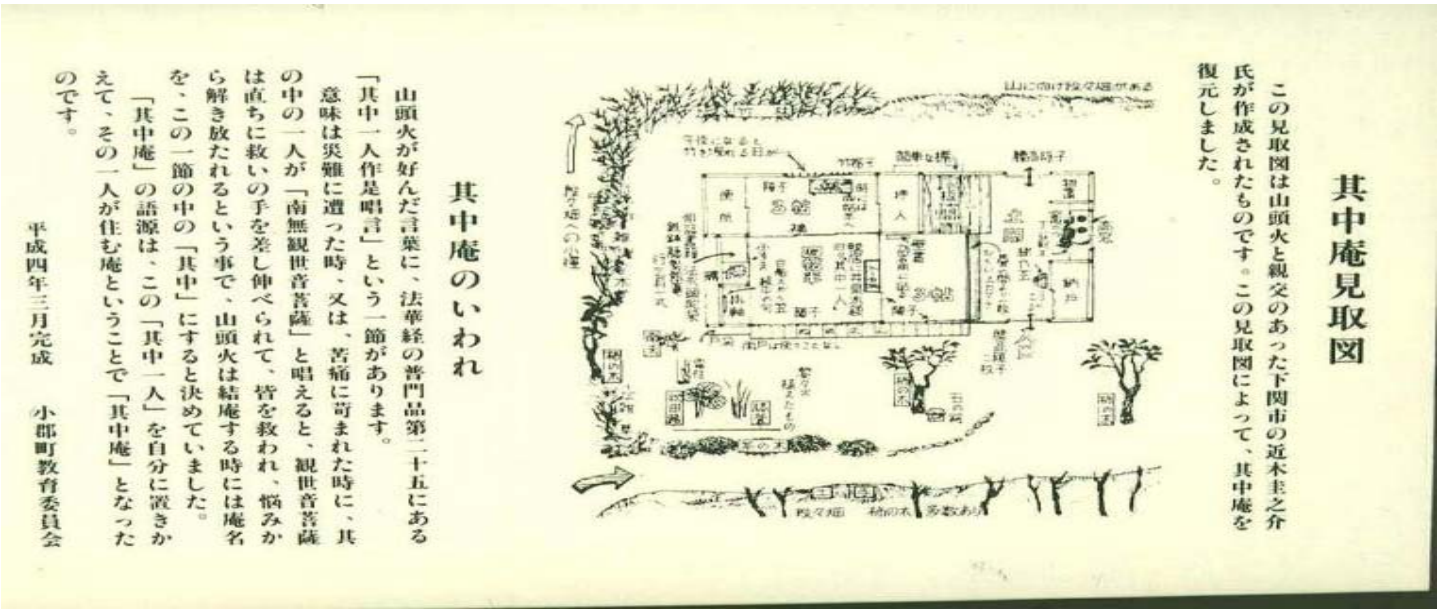
（六十にして落ちつけないこころ海をわたる）

今年の旅はこれで終わりです。

敏 翁

追記（其中庵（ｺﾞﾁｭｳｱﾝ））

小郡の駅から北へ徒歩 20 分ほどのところに其中庵（ｺﾞﾁｭｳｱﾝ）（下左図、下右図は室内）が復元されていて、又そのそばに山頭火記念館（正確な名は失念）があります。別の機会（1998 年）にそこも訪れていますが旅行記には纏めてありません。写真のみ以下に載せます。



其中庵見取図

この見取図は山頭火と親交のあった下関市の近木圭之介氏が作成されたものです。この見取図によって、其中庵を復元しました。

其中庵のいわれ

山頭火が好んだ言葉に、法華経の普門品第二十五にある「其中一人作是唱言」という一節があります。

意味は災難に遭った時、又は、苦痛に苛まれた時に、其の中の一人が「南無観世音菩薩」と唱えると、観世音菩薩は直ちに救いの手を差し伸べられて、皆を救われ、悩みから解き放たれるという事で、山頭火は結庵する時には庵名を、この一節の中の「其中」にすると決めていました。

「其中庵」の語源は、この「其中一人」を自分に置きかえて、その一人が住む庵ということで「其中庵」となったのです。

平成四年三月完成　小郡町教育委員会

参考：３句解説

「山頭火読本」（男はなぜさすらうのか）牧羊社　平成２年　１８００円

山頭火　鑑賞　５０句　　松井利彦　　より３句の解説を参考までに以下に載せます。

うしろすがたのしぐれてゆくか　　昭７．３「層雲」「層雲壇」

「昭和六年、熊本に落ちつくべく努めたけれど、どうしても落ちつけなかつた。またもや旅から旅へ旅しつづけるばかり」の前書を記し、更に、「自嘲」の前書を附している。第二の故郷ともいうべき熊本にも長く住みつけなかった。妻、サキノのことも、一度離れた心の緒をつなぎとめることは出来なかった。自分の生涯は矢張り、放浪の中で、旅の中で送るより他はないのか。このように思い至ったとき、それまでの心のわだかまりが、一度だけは自分からはなれた。そして、自己を他者として観照する眼をもつことが出来た。とぼとぼと人生を歩む自分のうしろすがた、それは淋しさからいえば、時雨の中を歩みつづけて、旅に生涯を終えた宗祇・

芭蕉らにつながるものではないか。旅の俳諧師として生きる自負もこめて、放浪の自らのわびしさを十四字に圧縮し、独自の短かい表現の中にこめた。

井泉水はこの句について「『自嘲』と前書がある。だが、寧ろ『留別』とでも題した方がしつくりしようかと思う。自分が自分の姿を自らあはれむといふよりも、そこの門に立つて見送つてくれてでもゐる友人への挨拶とした方がおもしろいであらう。」（「歩くもの」「俳談』昭１０．７　千倉書房）と、鑑賞の際の読みを示唆しているが、その辺に短律の問題が存在するであろう。短かさの極限は、鑑賞の幅を広くしすぎるところから、不安定となることは否めない。

なむあみだぶつなむあみだぶつみあかしまたたく　　昭１４．１２．３日「四国遍路日記」

四国遍路をつづけてゆく。寺寺をまわり、亡き親の供養、弟の供養を続けてゆく自分。今日は戦死した知人の回向だ。仏前では念仏をくり返しながら一心に祈る。「なむあみだぶつなむあみだぶつ」六字の名号を称え奉ると、わが信仰心に仏が感応し給うたのか、み明しかゆらゆらとゆれた。有難や、有難や。勇士の成仏とともに、悩み多き我をも救い給え、大慈大悲のみ仏よ。

昭和十四年十二月三日、五十七回の誕生日を迎えている。この日の感想としては、「自祝も自弔もあつたものじやない！」と記している。十一月二十一日から愛媛県松山に入り、道後南町の藤岡改一方で泊り二十六日までを過ごし、二十七日から十二月十四日まで道後湯町のちくぜん屋に泊っている。三日の夕方、高橋一洵が訪ねてきて一洵の「令弟（茂夫さん）戦死し遺骨に回向する、生々死々去々来々、それでよろしいと思ふ。十時ごろ帰宿、酒がこゝろよくまはらないので、そしていろいろさまざまのことが考えられるのでいつまでもねつかれなかつた。」これも同日の記録の一部で、句としては、「十二月三日夜、一洵居、戦死せる高市茂夫氏の遺骨にぬかづいて」の前書で、

供へまつる柿よ林檎よさんらんたり　　「なむあみだぶつ」の句の後は、　蝋涙いつとなく長い秋も更けて

六十にして落ちつけないこころ海をわたる　　昭１５．５．２８日「松山日記」

自分も何時の間にか六十歳になった。古人は、六十になるともろもろの執念が消えて悟りの静境に入るといっているが、自分の心の中にひそむ何かがどうしても落付いた気持にさせない。

故郷に近い小郡の其中庵で生涯を終ろうとしたが、又、新しい定住の地を探さねばならなくなった。

友人が、四国に来いといってくれる。その言葉を頼りに海を渡った。ああ、何時になったら落付いた心境に至りつくことが出来るであろうか。ああ、落付いて住む所と、そして心を持ちたいものだ。

松山での住居は、四畳半とその奥に六畳、六畳には押入れもついており、入口の小さい土間が炊事場、東向きにぬれ縁のある家で、御幸寺の納屋であった。高橋一洵の世話で、ここを後に大山澄太が一草庵と名づけている。この小屋について、昭和十四年十二月二十六日の木村緑平宛書簡では、「縁に随うて表記のところへ落ちつきました、すべてが私の分に過ぎたる栖家」という言葉を見せている。

昭和十五年の正月もここで迎え、「おかげでほんとうによい年越をいたしました。」（昭和十五年一月三日緑平宛）と述べているが、五月頃になると、「父の十九回忌」、「懺悔の熱涙をしぼる、憂鬱たへがたく」とか、「身心憂鬱」となり、中国、九州への旅を試みている。「六十にして」にこめた感慨は、定住の中でいつも捉われる鬱と不安定さの自認である。

以上